

平成23年度事業報告書

平成23年4月 1日から

平成24年3月31日まで

I 財団の運営

お客様本位の視点に立ち、大分県の文化振興施策と協調性を保ちながら、県民の幅広いニーズを踏まえた自主文化事業の実施をはじめ、県民の多様な文化活動の支援、地域文化との連携、さらには、国内外で活躍する大分県出身の芸術家の育成と活動支援など、本県文化創造の中核としての役割を積極的に推進することを基本方針として事業を実施した。特に、音楽を通した子どもの健全育成と豊かな感性の涵養を目的とした、「iichiko グランシアタ・ジュニアオーケストラ」の育成や優れた総合舞台芸術の創造・発信など、財団独自の取り組みを強化し、iichiko 総合文化センターが国において育成が促進されている「地域の中核劇場」として引き続き位置づけられた。

また、県民の国際化や在住外国人を支援するため、多面的な国際交流を企画するとともに、交流の場の提供や情報の提供等を行った。

さらに、お客様のための円滑な施設運営と良質なサービスの安定的な提供に努めるとともに、指定管理者制度の主旨に則ってより効果的・効率的な管理運営を行い、経費の縮減を図った。

II 総合文化センターの管理運営

1 ネーミングライツの定着

ネーミングライツについて、次の愛称の使用と周知を図り、あらゆる機会を通じて定着に努めた。

施設名	愛称
大分県立総合文化センター	iichiko 総合文化センター
大ホール（グランシアタ）	iichiko グランシアタ
中ホール（音の泉ホール）	iichiko 音の泉ホール
アトリウムプラザ	iichiko アトリウムプラザ
練習室等（スペース・ビー）	iichiko スペース・ビー

また、パートナーシップ履行委託事業により、財団主催の自主文化事業のうちパートナーの意向に沿った「ウェディングシンガー」、「ベルリン・フィル八重奏団」、「松竹大歌舞伎」、「プラハ国立歌劇場オペラ『トスカ』」、「サンクトペテルブルグ・フィルハーモニー交響楽団」、「ベー・チェチョル テノールリサイタル」、「NHK交響楽団大分公演」の7事業について、「iichiko presents」の冠を付し、公演を実施した。

2 自主文化事業の企画及び実施

(1) 企画

「大分県文化振興条例」や「大分県文化振興基本方針」に掲げられた県の文化振興施策遂行を担う中核として、「本物の芸術文化に触れる」「人を育て活かす」を基本に公演を実施した。

事業の実施に際しては、iichiko 総合文化センターパートナーシップ履行受託事業収入や文化事業基金を活用するとともに、文化庁の補助金をはじめ、(財)地域創造などからの助成金の獲得に積極的に取り組み、入場料等は低廉な価格設定に努めた。

(2) 事業実績

① 鑑賞系事業

【主催公演】

「iichiko グランシアタ・ジュニアオーケストラ『第3回定期演奏会』」は、仙台フィルハーモニー管弦楽団正指揮者である山下一史を招聘し開催した。108人の団員が心を一にし、シベリウス、モーツァルト、チャイコフスキーの3曲を、力強く、一生懸命に演奏し、1年間の練習の成果を大勢のお客様の前で披露し、惜しみない拍手をいただいた。

オーケストラは海外では世界の巨匠と称えられているユーリー・テミルカーノフが率いる「サンクトペテルブルグ・フィルハーモニー交響楽団」を、また、国内では、日本を代表するオーケストラ「NHK 交響楽団大分公演」をそれぞれ開催した。どちらも耳の肥えたお客様も納得の公演となった。

室内楽ではベルリン・フィルハーモニーの主要メンバーで組織する室内楽アンサンブルの中で最も長い歴史と伝統を誇る「ベルリン・フィル八重奏団」公演を開催した。ピアニストに人気の仲道郁代を加え、至福の演奏を提供した。

声楽公演では、甲状腺ガンにより突如声を失った韓国出身の「ベー・チェ Chol テノールリサイタル」を開催し、奇跡の歌声を披露した。

オペラ公演は TOS テレビ大分との共同主催で「プラハ国立歌劇場オペラ『トスカ』」を開催し、甘美な名アリア、美しい舞台やカラフルな衣装等、3年振りとなる本格的なオペラ公演を堪能していただいた。

ミュージカルは4月に「東宝ミュージカル『ウェディングシンガー』」、2月に「劇団四季オリジナルミュージカル『ユタと不思議な仲間たち』」の2公演を実施した。「ウェディングシンガー」は井上芳雄、上原多香子、大澄賢也などの有名キャストと生演奏による笑い涙満載の盛りだくさんの公演、一方の「ユタと不思議な仲間たち」は大人も子どもも楽しめる劇

団四季ならではの、人間の愛と友情、仲間の大切さを舞台から訴えるメッセージ性のある舞台であった。

日本の伝統芸能分野では毎年実施している「松竹大歌舞伎」と「人形浄瑠璃文楽」の公演をそれぞれ昼夜2回ずつ開催した。「松竹大歌舞伎」は片岡仁左衛門、秀太郎、愛之助などの出演による、「雨の五郎」と「義経千本桜」の演目を上演した。「人形浄瑠璃文楽」は昼の部と夜の部はそれぞれ異なる演目を上演したため、昼と夜の両公演とも鑑賞された人も多かった。どちらも毎年楽しみにしている方々を満足していただくのに十分な公演となった。

【共催公演】

アルゲリッチ芸術振興財団主催の「第13回別府アルゲリッチ音楽祭」のピノキオコンサートとマラソン・コンサートのほか「大分県立芸術文化短期大学の定期・卒業演奏会等」毎年共催しているものに加え、マスコミの各機関が主催したミュージカル「アトム」や「ディズニー・オン・クラシック」の公演で、多くのお客様をお迎えした。

②創造系事業・普及系事業

音楽を通した子どもの健全育成と豊かな感性の涵養を目的に発足した、「iichiko グランシアタ・ジュニアオーケストラ」は、3年目の活動となり、8月に iichiko アトリウムプラザでの「弦楽アンサンブルコンサート Vol. 2」の開催、2月には他団体主催の公演へのゲスト出演にも取り組んだ。

一方でホールを飛び出して医療施設への訪問コンサートやデパートでのミニコンサート等のアウトリーチ活動にも積極的に取り組むなど、活動の幅を着実に広げている。第3回目となった定期演奏会も、過去2回を上回る評価を多くの聴衆から頂いた。

大分県民芸術文化祭の開幕行事として、大分ロシア友好交流バレエ「くるみ割り人形」全幕公演を、ロシア国立ボリショイ劇場バレエ団から現役の一流アーティストを演出、振付指導、指揮、そしてソリスト等に迎えて上演した。出演は「おおいた洋舞連盟」の舞に「大分チェンバーオーケストラ」の生演奏、「アンジェルス児童合唱団」と一緒になって作り上げた初めての県民手作りによる総合舞台芸術となり、大盛況の公演となった。

5回目となった「MAROプロジェクト2011～大分の若き演奏家たち～」は、県内の若いクラシック音楽演奏家がNHK交響楽団第1コンサートマスターの篠崎 史紀らの指導を経て、ホールで共演をするというプロジェクトである。オーディション、2度の公開レッスンを経て選ばれたメンバーが、約半年間の練習の成果を発揮するコンサートを1月に開催した。

「人間国宝～その心と技～第五回 堅田喜三久」では、アナウンサー葛西聖司の案内のもと、芸における秘話などを聞くトークショーと名演奏をお送りする公演を開催した。5回目となる今回は鳴物の人間国宝「堅田喜三久」を迎え、本格的な長唄と、鼓、太鼓などの鳴物の魅力を十分に披露した。

また、例年開催しているワークショップは、歌舞伎、文楽、朗読、ミュージカルに加え、新たに長唄にも取り組んだ。朗読ワークショップは中津市や国東市でも開催し、他の公立文化施設との連携も図った。

県内最大の夏祭りである大分七夕祭り会場では、ミュージカルパフォーマンスを中心とするPR活動を行ったほか、若いアーティストに作品発表の場を提供する「アーティストプロデュース」では、iichiko 総合文化センター全体のにぎわい創出効果も生まれるように、iichiko アトリウムプラザを会場として開催した。

「MAROプロジェクト」の出演者には、県内全域に生の演奏に触れる機会を提供し、音楽への関心を高めてもらうために、県内の各地域の学校等で演奏活動を行ってもらう「文化キャラバン」の事業にも取り組み、好評を頂いた。

③地域文化振興支援事業

NPO法人denk-pauseとの共催で、夜の時間帯の外出が困難というお客様向けに、ランチタイムコンサートを初めて企画した。また、ステージ上に客席を設け演奏者により近いところで鑑賞していただくという通常とは異なるスタイルを取り入れるとともに、近隣の商店街店舗と連携を図ることで、公演来場者が各店舗に興味を持つと同時に、商店街が当会館に隣接していることを再認識していただくことも大きな目的の一つとして位置づけた。希望者が多かったため急遽公演を追加するなど、新たな顧客の開拓が出来るとともに、ランチタイムコンサートの需要の大きさを確認できるなど、実りの多い公演となった。

④その他事業（emo倶楽部会員優待事業）

emoクラブ会員への優待事業として真打ち昇進が決定している「春風亭一之輔」の落語公演を開催した。

3 サービス改善提案事業の実施

比較的舞台芸術に接する機会の少ない大分市・別府市以外に在住する子どもたちが、生の舞台を体験できるように、財団主催の自主文化公演13公演に287人（保護者・引率者含む）を招待し、生の舞台体験を提供した。子どもたちからは、「楽しかった」、「初めて劇場に来て

感動した」という感想が多く寄せられたが、中には「よく分からなかった」という率直な感想もあった。本物の公演を間近で鑑賞してもらうことで、文化芸術の裾野の拡大に繋げていくことが必要で、保護者や先生からは、子どもたちに生の舞台を見せる機会をつくる事業に対して高い評価をいただくと共に感謝する声をいただいた。

4 文化情報の提供

機関誌 e m o（季刊）、ホームページ、イベントカレンダー（月刊）により iichiko 総合文化センターで開催される催し物の情報提供を効果的に行った。また、ホームページの文字を見やすくする、動画を取り入れる、スタッフブログを開設するなど内容の充実を図り、迅速なデータ更新に努めた。

館内や近隣商店街に大型のポスターを張り出し、iichiko アトリウムプラザでは、特大の垂れ幕を設置し、PRと公演に向けた雰囲気づくりに努めた。また、館内にテレビモニターを設置して、主催公演のPR放送を流した。

大分を代表する祭りである、七夕祭り会場では、ダンスパフォーマンスとともに当財団のPRを行うなど、iichiko 総合文化センターに多くの県民が来場するようPRに努めた。

5 県民参加組織の育成

(1) 「e m o スタッフ」の育成

自主文化事業へ県民参加の場を提供するとともに、円滑な事業運営を図る観点から、公募により公演運営ボランティア「e m o スタッフ」を組織し、年2回の研修を通して、一層のスキルアップを図った。今年度は第10期生の募集を行い、11人の新たなスタッフを迎え入れた。

(2) 「e m o 倶楽部」の拡充

自主文化事業運営の円滑化と優れた芸術文化を身近に鑑賞する機会を増やすため、公演内容の充実を図り、友の会「e m o 倶楽部」への加入促進と会員サービス向上に取り組んだ。

6 お客様の声の反映・自己評価・職員研修

お客様の声を最大限に反映した運営を行うため、施設を利用していたお客様684人を対象にアンケートを実施し、提供サービスや満足度等について調査を行った。

自主文化事業公演時においてもアンケート調査を実施し、財団の自己評価を行い、サービスの向上及び業務の改善に努めた。

また、警備や清掃、設備などの関連業者との意見交換を行う「施設運営連絡会」、施設利用者やe m o倶楽部会員との意見交換を行う「お客さま懇談会」を開催した。

さらに、お客様からのご意見のみならず、財団職員自らが iichiko 総合文化センターの活性化等について考えるため、全職員を対象に募った職員提案について、定期的に職員提案検討会議を開催し、実現に向けて取り組んだ。

職員研修については、職員の文化レベルの向上を目指した、音楽学に関する研修と人権・同和問題に関する研修を外部からの講師を招いて実施した。

また、全国公立文化施設協議会等主催の研究会、他のホールで開催される優れた自主事業等に職員を派遣し、資質の向上と企画運営能力の養成を図った。

7 施設の管理運営

(1) 施設の利用促進

ホールをはじめ会議室、iichiko アトリウムプラザ等の施設利用の促進を図るため、過去の利用実績からリピーター候補を抽出し、積極的に要望や意見を聴くなど利用促進に努めた。

また、会議室紹介チラシの設置や、大分全日空ホテルとの相互の紹介により、OASISひろば全体のイメージアップと集客力アップを図った他、外国製ピアノ「ベーゼンドルファー」の魅力を伝えるレクチャーコンサートの開催をはじめとした新たな魅力発信や、4階受付カウンターの色分けをはじめとした、お客様にわかりやすい施設への改善に取り組んだ。

さらに、お客様のニーズに応じて休館日の臨時開館（7件）や利用時間の前後の延長（57件）等柔軟に対応し、積極的な貸館運営を行った。利用に際しては、お客様の要望に添った綿密な打合せを行うとともに、現場で頂いた意見を施設の管理運営に反映させ、快適で利用しやすい環境の提供に努めた。

地下駐車場においても、案内表示を充実させるなど、お客様の利便と利用促進を図るため、円滑な管理運営を行った。

また、主催者の作成するチラシ・ポスターのホール名に、iichiko の文字を入れるよう依頼することなどにより、ネーミングライツの名称使用の促進に努めた。

(2) 施設の維持管理

施設全体の清掃、警備並びに設備の維持管理及び舞台技術や機構の保守点検等については、専門業者に委託することにより正確性、安全性、

効率性を確保するとともに、現況、作業内容を財団が把握し指導することで、施設機能の維持と快適な環境の保持を図ることができた。

また、防災センターと連携した環境負荷低減への取り組み、全日空ホテルやNHK大分放送局と協働した年2回の防災訓練の実施など、環境対策やお客様の安全確保についても万全を期すよう努めた。

8 施設の利用状況

平成23年度のホールの利用率は、iichiko グランシアタ（90.5%）、iichiko 音の泉ホール（89.9%）とも平成22年度を上回った。

その他の施設については、新規固定客の確保等に努めた iichiko アトリウムプラザや、県民ギャラリーの利用率が昨年度より増加し、練習室も95%と高い利用率を維持している。会議室と映像小ホールの利用率は昨年度を下回った。

利用件数については、iichiko グランシアタ（238件）、iichiko 音の泉ホール（249件）とも平成22年度を上回り、利用人数については、iichiko グランシアタが190,620人（対22年度比4,907人増）、iichiko 音の泉ホールが70,305人（対22年度比2,338人減）となった。

両ホールのジャンル別の利用状況は、音楽が63.2%と最も多く、次いで講演・大会が19.3%、舞踊が11.3%などとなっている。

Ⅲ 国際交流事業

県民と外国人の相互理解と友好親善の増進や在住外国人に対する支援を図るため、「県民・在住外国人に広く開放された国際交流の拠点づくり」、「在住外国人の生活支援や県民・在住外国人への情報発信」、「国際交流に深く関わりのある団体等への支援」を3本柱として事業を実施した。

1 県民・在住外国人に広く開放された国際交流の拠点づくり

(1) 基本的な情報の収集・提供

国際交流プラザでは、県民と在住外国人が自由に集い、お互いの情報を交換しあえるような空間づくりを目指して、交流スペース、インターネット、新聞、雑誌、外国語図書等の利用促進を図った。

また、人権啓発フェスティバル等のブースに出展することなどにより、県民・在住外国人の国際化に関する基本的な情報の収集・提供を行った。

(2) 多文化共生意識の醸成

日本と外国の文化の紹介をはじめ、多様なプログラムを盛り込んだ国際交流フェア、県民と在住外国人が設定したトピックについて、日本語で話し合い、交流する「日本語 d e トーク」を実施するなど多文化共生意識の醸成に努めた。

(3) 多文化共生の地域づくり

国際経験豊かな講師による講話や外国映画の上映による国際理解講座、外国の文化を学ぶ外国文化理解講座や日本文化理解講座を開催し、多文化共生という考え方を地域社会の活性化に繋げることができるよう、概念の普及に努めた。

2 在住外国人の生活支援や県民・在住外国人への情報発信

(1) 在住外国人の生活支援

居住、子育て、離婚、在留資格等で悩みを抱えている在住外国人を対象として、行政書士による生活相談を実施するほか、中国語、タガログ語による相談を行った。

また、病気や災害発生時等の緊急時に対応するため、医療・福祉ハンドブックを普及を図った。

(2) コミュニケーション支援

ホームページ「おおいた国際交流プラザ」の運営や機関誌「ラ・エスタシオン」、「トンボ」、「大分情報」の発行、多言語による携帯メールでの情報発信を行うとともに、ボランティアを活用して通訳・翻訳などを行い、県民と在住外国人相互のコミュニケーションを促進した。

3 国際交流に深く関わりのある団体等への支援

(1) 他機関との連携・支援

日本語教室の運営や海外との文化・スポーツ交流活動を行う国際交流団体等に対して、補助金を交付しその活動を支援した。

また、国際交流研修会の開催などにより、在住外国人を支援する各種団体や行政機関との連携に努めた。

さらに、未来を担う青少年の交流を進め、異文化体験を通じた生徒・児童の国際相互理解を深めるため、専門のコーディネーターを配置し、交流プログラムの作成や受け入れ側の学校とのマッチングなどを行った。

IV スポーツの振興

1 スポーツ公園総合競技場活用促進基金の活用

大分スポーツ公園総合競技場（大分銀行ドーム）を拠点とした多様な交流の場を創出するため、基金による助成事業を行った。

2 (株)大分フットボールクラブへの貸付金管理

平成17年9月21日に(株)大分フットボールクラブへ貸付けた2億円については、遅滞なく、元本償還がなされている。

また、平成22年11月19日に融資を実行した2億円については、据置期間を経て、平成24年4月から償還が開始される。

(株)大分フットボールクラブからは、毎月の経営状況の報告を受けるとともに、県とも連携して滞りなく返済されるように貸付金の管理を行った。